

「論語」と「学習の 3 段階理論」
— 「理解」、「定着」、「応用」とは—

開倫塾
塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 私は足利市に住んでいます。足利市には、足利学校という日本で最古の学校があります。足利学校は、今から 650 年以上も前にとっても栄え、全国、特に日本の西地方から 3000 名の学僧、学問の僧が集い、孔子の教えである儒教を中心に学んだと言われております。その足利学校に行きますと、孔子の教えを弟子たちがまとめた「論語」のエッセンスをまとめた「論語抄」という冊子がお土産として 100 円で売られています。私は、足利市においでになった方々に「論語抄」を読んでもらいたいと思い、いつもお土産として差し上げております。
3. この「論語抄」は、私が足利高校に在籍していたときに毎週 2 回、3 年間にわたり漢文を教えてくださいましていた須永美知夫先生が作られたものです。その最初に次のような言葉がありますので、今日は皆さんと一緒にこれを学び、「学習とは何か」ということについて考えていきたいと思います。
4. その言葉とは、「子曰わく、^{し い}学^{まな}びて^{とき}時に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う、亦^{とも あ}た^{えんぼう}説^{きた}ば^ましからずや。朋^{たの}有り^{ひとし}遠^い方^{きどお}より^ま来^{くんし}る、亦^た楽^ししからずや。人^{たの}知^{ひとし}らずして^い慍^{きどお}らず、亦^また^{くんし}君^{くんし}子^しならずや。」です。これは非常に有名ですので、御存知の方もいらっしゃると思います。
5. 須永美知夫先生の通釈によりますと、「子(し)」とは孔子のことですから、「子曰わく」とは「孔子が言った」という意味になります。「学^{まな}びて^{とき}時に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う」の「学^{まな}びて」は「学問をして」、「時^{とき}に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う」は「その学んだところを、復習できる機会を逃さずに、何回も何回も、くり返して復習すると、学んだところのものは、自分の真の知識として完全に消化され、体得される」という意味です。「亦^また^{くんし}説^{きた}ば^ましからずや」は「これはまた、なんと喜ばしいことではないか」ということです。
6. この「学^{まな}びて^{とき}時に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う」は、私がこの「開倫塾の時間」ですっとお話をしている「学習の 3 段階理論」の第 1 段階である、うんなるほどとよく理解する段階にあたると思います。
7. 次の「時^{とき}に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う」は、2 番目の段階である定着、つまり自分の身に付けることにあたると思います。定着させるためには、復習できる機会を逃さずに、何回も何回も繰り返して復習することが大事です。
8. その具体的な内容として、この CRT 栃木放送でも私がずっとお話をさせていただいていることは 3 つあります。1 つは、一度習ったことは口をついてすらすら出るまでにすることです。学習したこ

とを正確に暗唱できるまでにする・口をついて出るまでにするために最もよい方法は、音読です。音読とは声に出して読むことで、学習したことを何回も何回も声に出して読み、大事なことは何十回も何百回も読みますと、意味がだんだんにわかってきます。内容も頭の中に入ります。そして、身に付きます。

9. ただ、口をついて出るだけでは不十分で、やはり正しく書けないといけません。ですから、書く練習、できれば楷書(教科書にあるようなくずさずに書いた書体)できちんと書く練習をしましょう。書くのは本当に難しいことです。目で見えてわかった単語や語句が果たして書けるかという、なかなか書けません。難しい字ほど、繰り返し繰り返し書く練習をしないと書けるようになりませんから、学んだことを正確に書く練習は大事です。
10. また、計算問題で 2×3 の答えが 6 になることの理由がよくわかったら、 2×3 という問題を見た瞬間に何も考えずに 6 という答えが出たほうがいいですね。これにも練習が大切ですので、「練習、練習、また、練習」の 1 つとして計算練習を加え、しっかりと行いましょう。
11. このような形で「学びて時に之れを習う」、つまり、学問をして、その学んだところを復習できる機会を逃さずに、何回も、何十回も、何百回も「練習、練習、また、練習」で、音読練習・書き取り練習・計算練習などを繰り返し行って復習すると、学んだところのものは自分の本当の知識として完全に消化され、自分のものになります。そのような学習の結果、「亦た説ばしからずや」ということに、つまり非常に喜ばしいことになるのです。
12. 次に論語の第一章に書いてある言葉が、「朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや」です。この「朋(とも)」とは道を同じくする友達のこと、全体の意味は「知識が豊かになれば、道を同じくする友達が遠いところからまでもやって来て、学問について話し合うようになる。これはまた、なんと楽しいことではないか」となります。
13. しかし、自分自身でいくら勉強しても、いくら実力を身に付けたとしても、それを他人がなかなか評価してくれないことは多々あります。そのことについて孔子は「人知らずして慍(いきどお)らず、亦た君子ならずや」と述べました。「人知らずして」とは「いくら勉強しても、この自分(の勉強)を認めてくれない人が世間にはいるものだ」という意味です。「慍らず」とは「怨(うら)まない」ということです。「亦(ま)た」は「それでこそ」という意味で、「君子ならずや」は「学徳(学問と徳行)ともにすぐれた君子ではないか」ということです。ですから、通釈は「いくら勉強しても、この自分を認めてくれない人が世間にはいるもの。そうした人がいたとしても、決して怨まない。それでこそ、学徳ともにすぐれた君子ではないか」となります。
14. 今日は、足利市にある日本最古の学校と言われる足利学校で、お土産として 100 円で売られている「論語抄」の学而(がくじ)第一(論語の第一章)にある言葉「子曰わく、学びて時に之れを習う、亦た説ばしからずや。朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや。人知らずして慍らず、亦た君子ならずや」について、皆さんと一緒に考えてみました。
15. 論語にはこのようにすばらしいことがたくさん書いてあり、皆さんの毎日の生活に、また、人生に活かすことができます。私も毎日少しずつですが読んでおり、新しい発見がたくさんあります。どうか放送をお聴きの皆様も論語をぜひ手に取って読んでいただければ有難いと思います。

— 2013 年 2 月 18 日(月)加筆・訂正 林 明夫記 —